公將臣印全集

第二十三卷

谷崎潤一郎全集　第二十三卷
定價一五〇〇圓
昭和四十四年三月十一日印刷
昭和四十四年三月二十五日發行
著者　谷崎潤一郎
發行者　山越　豐
印刷者　白井倉之助
發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

谷崎潤一郎全集　第二十三卷

目次

序跋・雑篇

羹前書　三
羹後書　五
羹序　六
甍序　七
麒麟序　九
酒　一一
創作前後の氣分　一三
多少讀んで居る人　一七
金色の死序　一八
一人一景（旅の印象）　一九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「少年世界」へ論文　二〇
異端者の悲しみはしがき　二三
異端者の悲しみ序　二六
口の邊の子供らしさ　二七
蛇酒に序す　二九
果して顏が好いか　三三
私の家系　三四
煉獄序　三五
二人の藝術家の話前書　三七
病める薔薇序　三八
蘇州紀行前書　四〇
支那旅行　四二
南京夫子廟　四三
谷崎潤一郎氏の書簡　四五
富美子の足斷書　四六

佐藤春夫君と私と　四七
性質の違つた兄と弟　五〇
鮫人附記　五二
鮫人作者記　五三
「鮫人」の續稿に就いて　五四
月の囁き前書　五七
半公推選文　五八
不幸な母の話斷書　五九
「十五夜物語」について　六〇
墮落作者記　六三
讀むことすら嫌ひ　六四
小說も書き活動寫眞にも力を注ぐ　六五
感覺的な『惡』の行爲　六六
妹　七一
「肉塊」の筆を執るに際して　七二

生きて居る人間にはあるが　七三
名妓の持つ眼（波多野秋子印象）　七四
横濱のおもひで前書　七六
無明と愛染作者斷書　七八
痴人の愛掲載豫告――最後まで熱をもつて　七九
「痴人の愛」の作者より讀者へ　八〇
黒髪序　八一
痴人の愛はしがき　八三
現代戯曲全集谷崎潤一郎篇跋　八五
西洋と日本の舞踊　八六
現代小説全集谷崎潤一郎集著者年譜　八九
現代日本文學全集谷崎潤一郎集序詞　九四
現代日本文學全集推薦文　九五
我が日・我が夢序　九七
芥川全集刊行に際して　一〇〇

名士と食物　一〇一
浦路夫人の内助　一〇三
明治大正文學全集谷崎潤一郎篇解説　一〇五
黑白序にかへる言葉　一〇九
黑白完結ことわり　一一一
「蓼喰ふ蟲」序詞　一一三
春秋滿保魯志草紙序　一一四
ねこ　一一六
小山内君の思ひ出　一一九
現代生活考序詞　一二三
月ヶ瀬　一二五
世界最大の文學的寶庫　一二六
猫――マイペット　一二八
大衆小説亂菊物語はしがき　一三〇
素顔のハリウツドはしがき　一三一

離婚挨拶　一三三
大衆小説亂菊物語前篇終り作者記　一三五
戀愛及び色情斷書　一三六
卍（まんじ）緒言　一三七
盲目物語はしがき　一三八
倚松庵隨筆序　一四〇
青春物語緒言　一四二
岡田時彦弔辭　一四四
夏菊休載に就いて　一四五
『文章讀本』發賣遲延に就いて　一四六
聞書抄作者の言葉　一四七
東京にて　一四九
聞書抄（第二盲目物語）初出卷頭　一五二
明治一代女序　一六二
東京にて（夏と人）　一六四

源氏物語序　一六五
潤一郎譯源氏物語例言　一七〇
えびらくさんのこと　一七五
偶感　一七八
三輪そうめんの歌二首　一八〇
易學史序　一八一
潤一郎譯源氏物語奥書　一八五
莫妄想　一八八
文樂首の研究序　一八九
細雪上卷原稿第十九章後書　一九一
聞書抄斷書　一九二
永井荷風氏書翰後書　一九三
蓼喰ふ蟲あとがき　一九四
稚兒序　一九五
「まんじ」に就て　一九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幼年の記憶　一九八
祇園序　二三九
安倍能成氏への書翰　二三二
少將滋幹の母作者の言葉　二三三
嶋中雄作弔詞　二三五
「細雪」瑣談　二三七
藤壺　二四一
懐石料理（爐篇）序詞　二四七
少將滋幹の母序文　二四八
「少將滋幹の母」上演に際して　二五〇
源氏物語草子序　二五一
源氏物語新譯序　二五二
「お遊さま」を見て　二五八
花の段　二六〇
冒險的な試み　二六一

盲目物語の原作者として　二六二
アルペンフレックス推薦文　二六三
羨望にたへぬ全集　二六四
谷崎と私序　二六五
現代日本の百人寫眞説明　二六七
墨塗平中　二六八
蓬生　二七一
八千代さんのことなど　二七二
佐多女聞書序文　二七四
餘白ある人生はしがき　二七六
春日やよ序文　二七八
谷崎潤一郎より永井荷風へ　二八一
鑑賞者の一人として　二八三
源氏物語の新譯を成し終へて　二八四
妻を語る　二八六

お茶懐石の粋　二八七
「蓼喰ふ蟲」を書いたころのこと　二八八
伊藤整全集推薦文　二九一
映畫のことなど　二九二
源氏物語の引き歌序　二九九
「十五夜物語」の思ひ出　三〇一
「綠波食談」に寄す　三〇二
新譯源氏物語の愛藏本について　三〇三
東京の正月　三〇四
鴨東綺譚著者の言葉　三〇八
嶋中鵬二氏に送る手紙　三一〇
菊がさね序に代へる言葉　三一一
潤一郎新譯源氏物語の普及版について　三一四
辻留銀座店開店にさいして　三一五
「月と狂言師」のこと　三一六

『鍵』本文訂正について　三一八
幼少時代はしがき　三一九
古典は原文で讀むのがほんたう　三二三
私の好きな六つの顔　三二四
伊豆山にて　三二六
「雑談明治」を讀む　三二一
歌々板畫卷に寄せる言葉　三二三
新劇その昔序　三二四
碧い眼の太郎冠者序にかへて　三二六
「親不孝の思ひ出」中斷のおわび　三二八
偶感（谷崎潤一郎全集刊行に際して）　三二九
谷崎潤一郎全集序　三四一
阿呆傳序　三四三
私と國歌大觀　三四五
むさうあん物語序　三四六

「少將滋幹の母」再演について　三四八
潤一郎譯源氏物語序にかへて　三四九
「貴多川」開店祝　三五〇
京舞禮讃　三五二
新版幼少時代序　三五三
あの頃のこと（山田孝雄追悼）　三五六
少將滋幹の母斷書　三五九
銀婚式披露挨拶　三六〇
敏介とピン助　三六二
「細雪」を書いたころ　三六四
幼き日の六代目　三六六
當世鹿もどきはしがき　三六八
潤一郎譯源氏物語愛藏版序　三六九
和辻君について　三七〇
無想庵君のために　三七二

舌代（喜壽挨拶）　三七四
お化粧室（安田輝子さんを推薦する）　三七五
私と中央公論　三七六
台所太平記掲載豫告――週刊誌は三度目　三七七
新譯に期待　三七八
今度は是非見に行く　三七九
思ひ出　三八〇
吉川英治君のこと　三八二
「ダンスに強くなる本」の序　三八四
むずかしい仕事　三八五
古典再現　三八六
佐藤春夫のことなど　三八七
佐藤春夫と芥川龍之介　三九一
路さんのこと　三九五
菅楯彦氏の思ひ出　三九六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com